

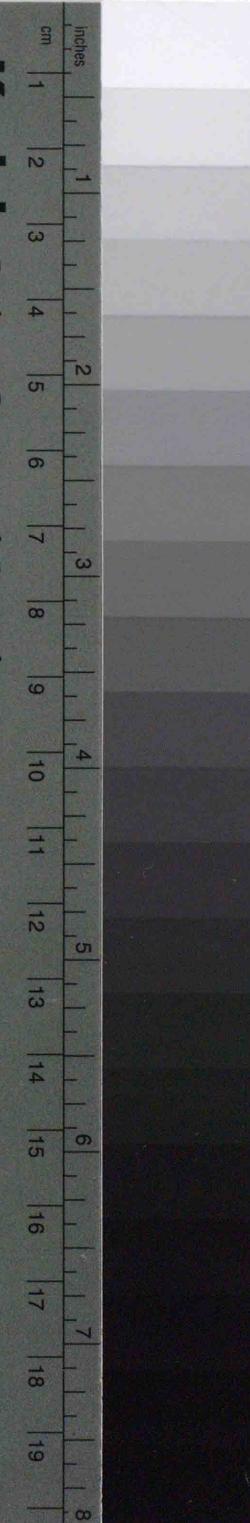
40515

教科書文庫

4
110
41-1923
2000026409

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak 2007 TM: Kodak

C Y M

© Kodak 2007 TM: Kodak

中學修真 卷 1

教科書文庫
4
110
41-1923
2000026409

4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

2759
T013日七十二月一年二十正大
濟定檢省部文

東京高等師範學校教授
兼東京帝國大學助教授 文學士友枝高彥著

中島大學圖書之次 中學修身

東京 合資富山房發兌



広島大学図書

2000026409



教科書文庫
4
110
41-1923
2000026409

天祖の神勅

豐葦原千五百秋之瑞穗國是
吾子孫可王之地也宜爾皇孫
就而治焉行矣寶祚之隆當與
天壤無窮者矣

御誓文

二

一 廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ
一 上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ
一 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサ
ラシメン事ヲ要ス
一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ
一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ
我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ天地
神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立ントス衆
亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ

明治元年戊辰三月十四日

教育ニ關スル勅語

朕惟フニ我力皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツル
コト深厚ナリ我力臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシ
テ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我國體ノ精華ニシテ教育
ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦
相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修
メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣
メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ
義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キ
ハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺
風ヲ顯彰スルニ足ラ

三

斯ノ道ハ實ニ我力皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ
遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ
悖ラス朕汝臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコ
トヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

御名御璽

詔書

朕惟フニ方今人文曰ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼此相濟
シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益國交ヲ修メ友義ヲ惇
シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコトヲ期ス顧ミルニ日
進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスル固ヨリ内國
運ノ發展ニ須ツ戰後日尚淺ク庶政益更張ヲ要ス宜ク上下
心ナニシ忠實業ニ服シ勤儉産ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚
俗ヲ成シ華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誠メ自彊息マサルヘシ
抑我力神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我力光輝アル國史ノ成跡ト
ハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪ノ誠ヲ輸サハ
國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今ノ世局ニ處シ我力忠

良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威徳ヲ對揚セムコトヲ庶幾フ爾臣民其レ克ク朕力旨ヲ體セヨ

御名御璽

明治四十一年十月十三日

内閣總理大臣 侯爵桂 太郎

中學修身卷一

目次

第一課 我等中學生	一
第二課 學校生活	七
第三課 身體と精神	三
第四課 體育	三
第五課 遊戲	二
第六課 休養	二
第七課 衛生	三
第八課 修學の目的	七
第九課 讀書	一

目 次

第十一課	自然	一
第十二課	質問	二
第十三課	規律正しき習慣	三
第十四課	努力	四
第十五課	快活	五
第十六課	熟慮斷行	六
第十七課	自重	七
第十八課	質素	八
第十九課	廉恥	九
第二十課	高雅	一〇
	直き心	一一

東京大學圖書印

中學修身卷一

友枝高彥著

第一課 我等中學生

幸ある境遇

我等は幸にも無事に成人し、天地の間に楽しい月日を送ること既にこゝに十有餘年である。今ひそかに我が身上を顧ると、限り知られぬ喜の爲に胸の高鳴るを禁じ得ないのである。

嬉しくも厚く恵まれた幸福なる我が身よ。畏くも我が大君のしろしめすこの盛世に生れあひ、懐かしい父母の厚

き慈愛の下に、古への人の夢想だもしなかつた小學校に入り、義務教育を受けて、一人前の國民として育てられて來た過去の歲月、たゞこれだけでも有難いのを、更にまた進んでこの中學校に入る光榮を荷なつたのである。思へば小學校の同窓生の中、この喜を味はひ得るものは抑、幾人あるであらうか。果して我が大日本帝國の我等と同年輩のもの幾何が、かゝる譽ある境遇に進み得たであらうか。彼を思ひ此を思へば、かくは幼き我が身ながら、身の幸福をしみじみと感ぜずには居られないのである。

凡そ如何なる人にも、皆その境遇に應じて必ず、なさねばならぬ務、自分の好惡^{かを}快不快などによつて或はなし或はな

さぬといふことを斷じて許さない嚴かな務がある。これをその人の本分といふのである。人は是非ともこの本分を完うせねばならぬ。この本分を完うしてこそ始めて人らしい人といふことが出来るので、若しこれを完うし得なかつたら、何等禽獸と異なるところのない卑しいものとなり果ててしまふのである。我等中學生には、また中學生としての本分がある。よくこれを辨へ、飽くまでも守り通す覺悟がなければならぬ。

抑、中學校は我が國の男子に必要な高等普通教育を受け、他日國家の中堅となる重要な人物を養成することを目的として居る。隨つて中學生たる我等の守るべき本分は、小

學校時代のものよりも、更に多く更に高くなつて居る。我等は自分でそれとも氣附かぬ間に、隨分重要な位置に上つて來て居るのである。

中學生の本分

中學生の本分として、最も重要な事柄が三つある。一は知識・才能を磨くこと、二は中學生として行ひ守るべき道を修めること、三は強健・有用な身體を養成すること即ちこれである。この三事は、生徒たるもの的一日も忘れてはならない重要な務である。そして又、そのいづれの方面にも偏してはならないものである。常に忘れず、いづれにも偏せず、圓滿完全に我が身の全力を注いで守り行はねばならぬものである。知識・才能だけは備つて居ても、身體が虛弱でも

あつたらどうかと考へて見よ。身體だけ徒に強くても、その行爲が人としての道に背いて居たらどうかと考へて見よ。更にまた學問・才能もなく身體も弱々しくて、それで人の道ばかりが立派に行ひ得られるか否かをも考へて見よ。我等が完全な人となるには、この三方面は、必ずその一つをも缺いてはならぬのである。

とかく人は境遇がよければよいに隨つて慢心を起し易いものである。十四五歳前後の年齢のものは、殊にこの弊に陥り易い。不注意にこれを放任して置けば、やがて習慣となつて、平氣で目下の者をいぢめ、同級生と衝突し、上級生と不和になるといふやうなことになつて、後に至つて深く

本分と修養

省て大いに恥ぢなければならぬことを感ずるに至るであらう。たとひ慢心は起さないにしても、境遇のよいのに安心して自然と本分を忘れてしまひ、つゝかくと遊び暮すものも少くない。これ等はどこまでも誠めねばならぬことである。よく我が身、我が心を引締め、飽くまで謙遜にして、益々修養に努めねばならぬ。

實るほどかしらのさがる稻穂かな。

我等は常にかやうに心掛けて、どこまでも際限なく我が身を發展せしめねばならぬ。今日我等が生徒として業を勵み本分を盡すことは、やがて國民としての最上の務である。かくして更に進んで大いに世界人類の爲に貢獻する途も開けて来る。我等はかくの如き覺悟を以て奮勵努力しなければならぬ。

第二課 學校生活

學校に入つて修養するのは、たゞ我が身一人ではない、多數の人が一緒になつて互に相扶け相勵ましつゝ修養するのである。どこへ行つても、少くとも學校といはれる以上は、必ず多數の人々が居るにちがひない。單に學校だけではない、凡そ人がこの世に生きて居る限りは、必ずかやうに多數の人と共に生活を營まねばならぬものであつて、これには一つの例外もない。そしてこれが本當に人の本性に

適つて居ることであつて、いつまでも盡きない人生の樂みが由つて来る所である。かやうに人々が相集つて生活するのを團體生活といふのである。

團體生活に必要缺くべからざるものは秩序を守ることである、即ちその團體に屬する各人が注意して規則を守ることである。或は人が自分の勝手に動くことが出来るとしたら、最も仕合なことと思ふかも知れない。けれども一人に許されるところは、他の人にもまた許されねばならぬ、かくて到る所に混雜があり、衝突を來し、一日として安靜な生活を送ることは出來ないであらう。併し、若し我等がこの團體生活を離れて生活し得るものならば、秩序を重んず

る必要もないかも知れないが、人は元來孤獨に生活し得ないものであるから、それは絶對に出來ないことである。

學校も一の團體であるから、必ず規則が必要である。これを校規とも校則ともいふのである。特に學校は生徒の智能を啓き、行ひ守るべき道を修めさせ、又強健・有用の身體を養成し、他日國家の中堅となるべき重要な人物を養成するといふ誠に高尚な目的をもつて居るのである。故に愈々厳格にその規則を守る必要が生じて来る。學校の生徒たるものは、くれぐれも注意して、常にその規則を守るやう心掛けねばならぬ。若し各人が思ひ立つの時間に集り、思ひ思ひの時間に歸るといふことになつたら、到底學校は成立

規則に準ずべき
もの

たない。學校が成立たないのに、生徒だけがあらう筈がないのである。中學生が校則を遵守するのはやがて自らを立たしめる所以である。

團體生活に於て規則を重んずべきは既に述べた通りであるが、この外規則に定めてないもので、しかも規則と同様に大切なものがある。師命・訓戒、それに學校の善良な習慣などはその主なものである。これ等は決して生徒を束縛する爲のものではなく、學校全體の秩序を維持し、また各生徒の修學上の便益の爲に存するのである。故に規則と同様に重んじ守らねばならぬ。

規則と自由

世には規則を極めて不自由なものやうに考へて、これ

を守らないでもよいやうに思ふものがある。また守りながらも大きな束縛を感じ、我が身の不自由をかこつものもある。これは自分の我儘を覺らず、自由と放埒はるわとを混同して居るものである。試に考へて見よ、天に於ける日月星辰の運行、四時の變遷、我等に於ける身體上の諸機能、精神の活動方法など、一として一定の秩序に従つて居ないものはないではないか。實に規則正しいことは天然、自然の根本の性質である。この大法の下に於て、始めてすべてのものは眞の自由を得るのである。これにはづれるのは自由でなくて放埒である。更に譬を我等の手にとつて述べて見よう。手の自由な活動は、手の活動の法則に従つた時にだけ

規則の守り方

なし得るのである。これに反した働き方をさせたら、結局自ら我が手を損傷することになつてしまふではないか。かかる仕方をどうして自由といはれよう。誠に眞の自由は規則の下に於てのみあり得るのである。

我等は既に學校生活に於て規則の必要缺くべからざる所以と、これを是非とも守らねばならぬ理由とを學んだ。然らば如何にしてこれを守るべきか。これには凡そ二通りを考へることが出来る。師長の命令の下にいや／＼ながら守るのはその一であり、他の命を待たず自ら進んで守るのはその二である。前者を他律的といひ、後者を自律的といふ。他律的の守り方は、恰も牛馬の荷物を負うて道を行くと同様である。牛馬には自らその荷物を運ばうとする意志はない、たゞ人の鞭を恐れて、止むなく歩むに過ぎない。我等にして、若し他律的の遵守にとゞまらんか、牛馬と何の擇ぶところもない。我等はこの状態に甘んじて居ずに、進んで自律的の域に達しなければならぬ。

第三課 身體と精神

心身の相關

僅か一本の小さな刺シナガが指先にさゝつたとしても、我等は何となく不安な、いら／＼した、いやな氣持になるであらう。又さほど大きな心配事でないにしても、何か心中に不快な事がある時には、平常の如く快活に自由に身體を働かせる

ことは出來ない。身體と精神との關係は極めて微妙であつて、そのいづれかに故障が起つたならば、それがどれほど少しであつても、必ず他の一方に影響する。「健全な精神は健全な身體に宿る」といふ諺は、一方に於て健全な理想的の心身を持たねばならぬことを教へて居ると共に、他方に於ては實にこの心身の微妙な關係をいひ表したものである。

一家の中に病人があれば、他の健康な家族までが不快な暗い氣持になる。一社會に病人が多ければ、その社會全體の活動は必ず鈍くなる。又個人として見ても、心身の健全な時には、常に新鮮な、自由な、そして愉快な生活を營み得るが、不健康な時には、何事につけても悲觀的な引込思案の態

度となる。實に心身の健否は、人生・社會との交渉に於て重大な異なつた結果を來すものである。我等は如何にしても健全な心身を鍛へ上げて、出來る限り有用な活動をせねばならぬ。殊に人類文明の進歩と共に、とかく餘計に心身を勞することが多く、これが爲に我等の健康は害はれ勝ちになるから、十分心しなければならぬ。

心身の健否は人の賦性に由ることもあるが、その大部分は修養の如何に由るものである。明治天皇の御製に

つねに身の養ひ草をつみてこそ

人のよはひは延ぶべかりけれ。

とある。これは單に身體だけに就いて仰せられたのでは

なく、精神に於ても同様であると拜察し奉るのである。たゞひ我等が天性薄弱な心身をもつて居るとしても、決して悲觀すべきではない、その道を得てこれを修養すれば、必ずや健康となり得るのである。これに反し、天性健康であるからと言つて修養その道を得なければ、遂には劣等な心身に墮し終るのである。主とする所は、實に修養の道を得るか否とにあら。古來の英傑・偉人の傳記を繙いて見よ、彼等が悉く天賦の健康を持つて居たのではない。通常ならば單なる長命をすらなし得なかつたであらうと思はれる者であつて、しかも偉大なる業を後世に遺し、甚大な感化を我等に及したものも少くない。これは皆その修養の道を得たのに由るのである。

心身○健康といふのは、たゞ體軀が徒に肥大して居て無病なのをいふのではない。眞の健康は心と身とが調和的に發達して、そのいづれにも偏して居ず、しかも何等缺ける所がなく、強壯にして有用な活動をなし得る状態にあるのをいふのである。山は高きを以て貴しとしない、木があるからこそ價値があるのである。我等の心身に於ても亦然りで、讀書は萬巻に及んでも、身長はたゞ六尺餘に達しても、それだけでは人としての價値はない。人の人たる所以は、それを有効に使用し得て、偉大な活動を完成する所にある。強壯と有用、修養の目的はこゝにあるのである。

樹木の枝振を矯めようとすれば、その未だ十分に發育しない中に着手せねばならぬ。若し發育し終つた後に手を加へたならば、却つてその樹木を損傷するに至るであらう。我等が心身を修養するのも亦これと同様である。幼い中に効を收めなかつたならば、後日に至つて如何に悔いても及ばないことになる。殊に中學生時代の心身は、人生に於て最も注意すべき過渡期にあるのである。隨つて修養よりもしきを得れば、その効果が極めて大であると共に、等閑懶惰に過せば、その害も亦甚だしいのである。人生の基礎は中學生時代に定まるといつても決して過言ではない。我等はくれぐれも注意して、後日悔いることのないやうにせねばならぬ。

然らば心身修養の方法如何、これが我等の考ふべき最も重要な問題である。その人の境遇により、天賦により、その詳細な方法は一概に定め難いけれども、一般にその方法は二つの主なる方面に分けて考へられる。一は攝生であり、一は鍛錬である。前者は心身を保護して害悪に遠ざかる方面であり、後者は進んで困難にも當り強壯・有爲な心身を鍛上げる方面である。心身の修養に於てこの二つの道は共に必要缺くべからざるもので、若しその一方を缺き、又はその一方に偏するやうなことがあれば、十分な効果を收めることは出來ないのである。

身體修養と體育

第四課 體育

身體の鍛錬は、如何なる時でも、如何なる處でも、如何なる人にも必要なものである。鏡のやうに靜平な大海にも、時として怒濤逆巻く大暴があると同じく、我等人生の行路にも、亦實に幾多の憂患・困苦があると身に迫つて來ることがある。殊に心中に抱く目的が大きい程、また自分の地位が進めば進む程、愈々、艱苦は増して來るものである。若しその度毎に茫然自失して氣力を落し、強く己を持続し奮然として突進する力が乏しかつたならば、人生の事何一つとして仕遂げ得らるべくもない。この萬難を排して奮ぬ。

體育を廣く考へると、家事の手傳通學の歩行などを始めとして、行住坐臥すべて我等の身體を動かすものは、悉く體育の範圍に入るのであるが、特に直接に心身を鍛錬することを目的とするものとして、學校の體操・教練、種々の競技遠足・登山・水泳・冷水浴・冷水摩擦及び武術などを數へることが出来る。時に古今があり、處に東西の別がある、隨つて種々

の點に於て多くの事情を異にして居るから、古人の行つたこと、歐米人の行ふところを直ちに採つて我等の境遇に移し用ひることは出來ない。また我等はあらゆる種類の體育を悉く併せ行ふことも到底出來ない。また實際やつて見たところが、その効果を擧げることは不可能な事である、否却つて悪い影響を及すに至るかも知れないのである。我等の取るべきは、出来るだけ詳に我が身を省察して、最も自分に適したもの擇んで、自分を育て上げて行くといふことである。

體育に就いての
注意

體育上注意すべきは、まづ第一に、時間に於ても、分量に於ても、共に適度でなければならぬといふことである。とか

く我等は面白さに紛れて時間を過し、また程度を越し勝ちのものである。身體を鍛へるといふ事は、或程度に達すると、それ以上は如何に多く行つても、徒に時間を空費し、疲勞を増すだけで、何等の効果をも生じないものである。面白くとも、遊びたくても、一定の程度に至つたならば、斷然切上げることに努めねばならぬ。次には順序といふ事である。凡そ何事でも必ず順序がある。體育にしても同様で、若し何等の準備もなしに突然急激な運動をやり始め、また突然中止するとしたら、それこそ危險極ることである。心身に何等の準備なしに事を行ふのは失敗の本である。また人の體質によつて、或種の運動はその者にとつて過激であ

るものがある。然るに何の考慮もせずに無闇にそれを行ふといふことはよろしくない。適當の段階を経て漸次に強い程度のものに進むやうに心掛けねばならぬ。最後に重要なことは永續といふことである。一旦の感激によつて體育に心を向け、初の中こそ懸命に行ひつゝけても次第に氣力が衰へて、一ヶ月もたゝぬ間に全く忘れ果てたやうに捨てつて顧ないといふことでは無駄である。一朝一夕で體育の効果が表れるものではない。我等は努めて永續するやうにしなければならぬ。

體育によつて得るところは單に身體に關してだけではない。その方法よろしきを得れば、勇氣・節制・禮儀・親切・共同

一致などの善良な徳をも身に養ひ得て、大いに人格を向上せしめることが出来る。今日の歐米に於て運動家といふことが紳士を意味するに至つたのに徵しても、如何に體育と品性との關係の密接であるかを知り得るであらう。

近時我が國の體育は頗る目覺しい發達を遂げて來たが、これを諸外國殊に歐米諸國に比べると、及ばないことは遠いのである。一國の興廢はその國民の體力の如何に係ることが多い、そして體育は體力を養成する最良の方法である。我が國民の體力が如何に貧弱であるかは、我等の夙に熟知するところである。我等は今後益々意を體育に注ぎ、世界に於ける日本國民として恥づかしくない人物となら

ねばならぬ。

第五課 遊 戲

心身の鍛錬を直接の目的として居る體育と共に、我等の考へて置くべきものは遊戯である。遊戯もたゞその結果からばかり考へると、體育と同様に我等の心身を鍛錬する効果をもつて居るものであつて、何等體育と異なるところがない。併しこの二つは根本に於て大いに異なつて居る。即ち體育は我等の心身を鍛錬するといふ一つの目的を以て行はれる。例へば、學校の體操・教練のやうなもので、これを行ふ人は餘りに好ましくなくとも、これによつて心身を

鍛錬し得るが故に行ふといふやうに、目的に對する手段としてこれを重んずるのである。これに反して、遊戯は或他の目的を達する手段として行はれるものではなく、遊戯それが自らが目的である。體育が我等の重んずべき重要な作業となるのは、心身を鍛錬するといふ大切な目的をもつて居るからである。若しこの目的を達することが出来なかつたならば、體育としての價値はないといはねばならぬ。

併し遊戯はそれ自らが目的であるから、たゞ遊戯さへすれば既にその目的を達したので、遊戯としての價値は十分あるといふことが出来る。實際我等が日常行ふ遊戯に就いて考へて見ると、このことがよくわかる。體操の時間に運

動場に整列した場合には、自らその目的を頭に浮べて、身體のదるいやうな時でも、努めてこれを行はうといふ氣持になる。併し友達と鬼ごっこをしようとするやうな時には、たゞ鬼ごっこをしたいといふ考ばかりが心に働いて、他に何の目的もない。遊戯は全く自然の要求から起る自發的な自由な活動である。

故にこの遊戯を行ふ精神を以て、すべての體育を行ふことになると、その効果は極めて大である。體育の理想はここにある。そして今日の體育は、この理想に近づきつゝあるものといふことが出来る。種々の競技・登山・水泳の如きを始め、多くのものは皆遊戯的精神を以て行ひ得る體育である。

ある。

我等日常の生活を顧ると、遊戯に費される時間はなかなか多い。殊に幼少の頃は、生活の大半は遊戯であると言つてもよい程である。だから幼時に遊戯を多くするといふよりも、寧ろ我等人類は、遊戯する爲に幼時をもつと言つても過言ではない。

さてこの遊戯は、我等がよりよい生活を營まうとする理想に對して、どれ程の價値があるであらうか。まづ第一に遊戯は愉快である、我等に相應した遊戯はいくら行つても興味が盡きない。隨つて活動を永續する傾をもつて居る。この故に體育の目的とするところを一層容易に收得する

ことが出来る。殊に快活持久力などは多く遊戯によつて養成される。次に遊戯は自發的な自由な活動であるから、我等の精神と身體を働かせることが頗る多い。これによつて我等は心身兩方面の試練を経て、種々の重要な力、例へば意志の力、決斷力、動作の機敏、注意力、觀察力、勇氣などを養成することが出来て、日常生活の基礎を作り得るのである。併し體育の目的から見ると、その性質上過度に運動する弊に陥り易く、隨つて身體の餘り強壯でないものの健康を害することがある。また活動が體操のやうに均齊でなく變則であるから、時として身體發育の不調和を來す虞がある。かやうに利害はあつても、とにかく體育の機運を進めるに

は極めて有効なものである。

遊戲に關する注意

遊戯に就いて注意すべきことは、體育の場合とほゞ同様であるが、遊戯に於て特に陥り易い弊は、前記の通り過度に流れることと、身體の偏頗な發育を來すことであるから、これに就いて十分な注意を要する。また競技殊に對校試合などに際して、學校の名譽はたゞ勝利にあるものと解して、その手段を顧ないといふ弊が屢々起る。歐米諸國でも以前には隨分この種の惡風があつたが、近頃は「綺麗な試合」といふことを重んじ、双方とも同一の條件の下で、正々堂々、紳士的態度でその技を競ひ、苟も禮儀に背くやうなことはしなくなつた。我等は、我が國古武士の美しい試合精神に鑑

み、慎んでその弊を改め、諸外國の學生にたち優つた精神を發揮するやうに努めねばならぬ。

第六課 休 養

活動と休養

活動は人生の實相である。何等の活動もせずにその日その日を過すといふことは、我等には堪へられない苦痛である。若しこれに堪へ得たとしても、それは眞の人としての行くべき道ではない。活動につぐに活動をもつてする、こゝに人の生命がある。併し人の心力・體力には限りがある。絶えざる活動といふことは、この有限の心力・體力を無視して、何の秩序も規律もなく、文字通りに動き続けること

を意味するのではない。又かゝることは一日や二日は續くかも知れないが、不斷に張りつめた弓の弦は切れ易いのと同じ道理で、到底永續きのするものではない。活動をして眞の活動たらしめるものは實に休養である。この意味から、休養も亦一種の活動といふべきである。眞の活動は實に眞の休養と離すことの出來ないものである。この休養には、一時的の謂はゆる休息と、比較的長い間に亘る睡眠とがある。そして睡眠は休養の主要なものである。

我等が長く活動を續けて居ると、何人も經驗するやうに、次第に心身兩方面に疲勞を感じて来る。この疲勞は、活動の進むと共に次第に増して行くものであつて、或程度に達

すると、もはや、どうしても活動することが出来なくなる。これは誠に危険な状態である。我等はこの状態に達する以前に、十分の休養をすることが肝要である。この休養の中でも、殊に睡眠は、かやうに疲労した心身を癒すと共に、また新しく活動する元氣を我等に與へるものである。終日活動して楽しく床に就いた時の安靜と、熟睡して起きた朝の溢れるやうな元氣に満ちた心身の快感とは、我等の常に味はつて知つて居るところである。

睡眠は十分にせねばならぬ。併し過度になつてはならぬ。この十分といふことと過度といふこととを混同してはいけない。睡眠が不足すれば翌日を全く不快の中に送らねばならないのと同じに、過度の睡眠も亦我等の心身を惰弱に陥れて、十分な活動をすることの出來ない状態に導くものである。然らば十分の睡眠とは何をいふかといふに、熟睡することである。眠る時間が徒に長いのは熟睡とは言へない。時間はさほど長くなくても熟睡しさへすれば、我等の疲労は恢復するのである。熟睡するには一般日常の規律を正しくし、殊に腹工合をよくせねばならぬ。故に飲食の注意は最も肝要である。教室に於て居眠をする者を往々見受けるが、これは前夜に熟睡しなかつたことが重な原因である。また時としては、夢ばかり見てよく眠れないといふことを訴へるものもある。これは睡眠の不足

を來しやがては學業の不進歩といふことになるから、大いに注意せねばならぬ。かやうな場合には飲食運動を適度にし、身體を清潔にし、寢床に入つての姿勢などにも氣をつけるがよい。

早寝・早起

人によつては習慣の結果、又はその人の生來の性質上、就眠の初には熟睡することが出來なくてだんく眠が深くなり、朝近くになつてから深い眠に就くといふものもないではない。併し一般に初に深い眠に入り、夜明になるに隨つて淺くなるといふのが普通である。また夜半以前の睡眠の効能は、夜半以後のものにずつとまさつて居る。故に我等は、日常早く寝て早く起きる習慣を養ふやうに心掛けねばならぬ。晏起の習慣は我等青年の恥である。

得 他人に對する心

我等は既に、活動によつて生じた疲勞は休養によつて恢復され、休養の主要なものは睡眠であることを知つた。故に自ら必要な休息をなし、また十分に睡眠するやう工夫すると共に、また他人の休息・安眠を尊重せねばならぬ。殊に夜半になつて自分の我儘から激しい物音を立て、高聲に談話し、甚だしきは放歌などして他人の睡眠を妨害するやうなことは、甚だ心なきふるまひであつて、教養ある人の恥辱とせねばならぬところである。

第七課 衛 生

身體の正常な發育をはかり、疾病を豫防し、健康を保護・増進する方法を衛生といふ。例へば、姿勢を正しくし、歯を清潔にすることなどを始めとして、食物の分量に注意し、適度の休養をなし、また呼吸器を大切にし、傳染病に罹らぬやうに努めるなどはその一端である。とかく平常衛生に注意して生活することは、我等青年には一見臆病な引込思案のやうに考へられ易いが、決してそんなものではない。實に豫防の一オーンスは治療の一ボンドに値するもので、積極的の體育と相俟つて、至福の人生を送る一大要件である。

衛生に關して心得べき事柄は、一々枚舉するに遑のないほど澤山あるが、その根本精神ともいふべきものは、節制と

清潔とに注意することである。

節制とは物事に一定のきまりをつけて常規を逸しないことで、飲食を慎み、休息・睡眠・運動を適當にし、嚴寒・酷暑に對して無分別なふるまひをしないことなどをいひ、清潔とは身體衣服・住居などを綺麗にしさつぱりとすることである。青年時代は心身の發育が極めて旺盛であるから、やゝもすると血氣にはやつて、何事につけても過度に陥り易い。殊に飲食・運動に於てさうである。疾病を癒すべき薬品も、分量を過すと却つて身體を害する。飲食物は我等に一日も缺くことの出來ない重要なものであるが、節制その道を失へば遂に胃腸を害し、終生その苦をなげく持病をさへ惹

起すに至ることがある。故に我等は規律を立て、分量を適度にし、時刻を一定して、常に堅くこれを守らねばならぬ。この外、未熟の果物、心身を強く刺戟するものなどは必ず用ひてはならぬ。殊に酒類、煙草などは衛生に害があるだけではなく、風儀上にも種々の弊害を生ずるものである。未成年者の喫煙は既に早くから我が國法の禁ずるところであつたが、最近に至つて法律はまた未成年者の飲酒をも禁止するに至つた。これは國民の衛生上寧ろ當然のことである。我等は自らの健康を進める上からも、違法の精神からも、絶対にこれ等の使用を避けねばならぬ。

過度の運動はたゞに無益であるばかりでなく、却つて身體を害する。併し運動の不足もまた健康上よろしくない。

故に我等は課業に妨とならない程度で、適度の運動をせねばならぬ。これが即ち運動の節制である。

試に身體や衣服などの不潔なものと談話を交へて見よ、啻に不快であるばかりでなく、何となくその者の品位の卑しいことをも感ずるであらう。我が身の廻りの不潔に就いて他人の感ずる心持もまた同様である。身體・衣服などの不潔は單に禮儀・品位の點から恥づべきことであるばかりでなく、衛生上まことに危険である。健康を害することも、恐るべき傳染病を生ずることも、皆この不潔が原因となるのである。故に我等は身體・衣服その他身の廻りのもの

から、次第に居室・住宅などに及して、常に清潔を保つやうに心掛けねばならぬ。清潔の方法には種々あるが、採光・通風をはじめ、沐浴・洗濯・洒掃などは、最も肝要なことである。清潔を重んずるは、古來我が國民の美風である。我等は努めてこれを存續せしめねばならぬ。

我等は身體の清潔と共に、精神の清潔を圖らねばならぬ。精神の清潔とは、心を常に公明正大に持つことである。邪念・惡意は精神の不潔である。かくて我等は心身兩方面の清潔に留意し、強健・快活に生活し、少しでも病魔の乘ずる隙のないやうにしなければならぬ。

社會と衛生

我等は多數の人々と共に共同生活を營んで居るのであるから、一身の健否は直に家族・社會に影響する。故に若しあが身の不注意から傳染病などに罹つたとしたならば、單に我が身一人の不幸であるばかりでなく、一家は固より、隣家・近所の迷惑、社會一般の禍は甚だ大きいものであるから、これ等の點に就いては深く慎まねばならぬ。

第八課 修學の目的

學問

孟子
支那の學者・經
世家・神武紀元
二百八九年—一三
百七十二年。

我等が毎日學校で修めて居る學問には、數學とか、英語とか、地理とか、歴史とか色々な學科がある。けれども學問とは、それ等の學科からたゞ知識を修得するばかりをいふのではない。孟子の語に「學問の道は他なし」、その放心を求む

るにあり。とあるやうに、知識を修得すると共に、ひたすら我が徳を修め、我が身に備つて居る天性を全うして、これを破らないやうにする道なのである。太古未開の世に於ては、我等人類も殆ど他の動物と同様に、徒に食ひ徒に眠つて、空しくその一生を終つたのであるが、靈妙な智能の動が次第に發達するにつれて、人類は絶えざる努力を以て、智を積み磨いて、これを種々の組織に組立て、遂に今日の文明を築き上げたのである。隨つて我等の現代に於ける生活は、學問の生活と言つても決して過言ではない。

この文明の世界、學問の世紀に生れた我等年少の者は、朝に夕に怠らず届せず、全力を注いでこれ等種々の學問を修

得せねばならぬ。若し學問に於て劣ることがあれば、到底立派な人格者として現代に處することは出來ない。元來我等の精神は極めて靈妙・不思議な性質をもつて居るもので、研けば研くほど、鍊れば鍊るほど、愈、發展・進歩して、いつも止るところのないものである。この天性を達するのが眞によく學ぶものといふので、これによつて我等は、一には現代の文明を理解し、人類祖先の偉大な功績を仰ぎ深甚な恩澤に感謝すると共に、一には更にこの文明を基礎として、自ら新文明を作り出して、後の人類に貢獻するやうな偉業を成就し得るのである。されば我等は、學校に於て授けられるすべての學科に亘つて平均に力を注ぎ、猥りに好き

嫌ひなどせずに、十分これを修めて行かねばならぬ。世に食はず嫌ひといふことがあるが、どんな佳肴でも、食はねばその美味のわかるものではない。如何なる學問でも、必ずそれドリ獨特の妙味のあるものであるが、一時の我儘からそれを悟らずに選好をして偏頗に流れるものがないでもない。これは誠に心ない仕打であつて、眞に學に就く所以ではない。各學科に於ける平均の發達、これこそ實に我等の常に旨とせねばならぬところである。眞の學問の味は、眞に學んだものにして始めて味はひ得るものである。

學問の目的を一言にいへば、本當のもの、眞正なものをつかみたいといふことになる。併しこの本當のもの、眞正な

ものをつかまうとするのは、我等の精神に獨りで起つて來る動であつて、全く自己の要求である。學問は汲んで盡きない道理を求めるのであるが、やがてそれは我が心の無限の力、無限の光を研出すことである。故に學問をすることは、我が身に對する最も尊い本務の一であつて、學問そのものが目的となるのである。併し學問を研究して智能を得るのは、この我が身に對する本務を遂行するといふことばかりが目的ではない。これと共に社會・國家・世界人類の爲に貢獻することを忘れてはならぬ。我等が今日ある所以は、殆どみな社會の恩惠に因るのである。この恩恵に對して報ずることがなければ、人として立派なものとは言

はれない。我等の日常生活を顧よ、身の廻りの學用品といひ、醫藥といひ、交通機關といひ、すべてこれ皆社會の人々の發明・發見によらないものはないではないか。我等はこれ等の便益を受けるばかりで、更に一物をもそれに貢獻せずに、それで自ら満足が出來るであらうか。一人前の人としては、決してこの狀態に安んじて居ることは出來ない。即ち進んで廣く社會の爲に貢獻することは、また學問の目的として忘れる事の出來ないものである。かくて我等は益々人類文明の發展を圖ることが出來るのである。

學問の方法

學問の方法は一にして足らない。學問の種類の異なるに隨つて、その方法も亦澤山ある。併し我等中學生として

學問する方法は、ほゞ書物によるものと、先生から教を受けるものと、自ら進んで人間界・自然界を觀察研究してこれら知識を得るものとの三つとなるであらう。この三方面は共に必要缺くべからざるものである。

第九課 讀書

讀書の効果

「書は少年の滋味で老年の娛樂である。順境には心の節ともなり、逆境には庇護と慰安とを與へる。家に在れば心を樂しませ、外に出た時も邪魔とはならぬ。夜の伴旅の伴、僻地の伴」とローマの名士キケロは言つた。これは讀書の効果の大きなことをいひ表したものである。實に書物は

Cicero
(106—43 B.C.)
キケロ
羅馬の辯論家。
八十九年紀元前
十六五百
十五。

我等にとつて必要缺くべからざるものであつて、今日我等が修得する學問の大部分は、讀書によつてであると言つても不當ではない。若し我等が己一人の經驗・觀察・思考などをのみ基として孤立的に學問を修めたとしたならば、如何に天分の優れた人でも、如何にその努力は大であつても、その結果は極めて狭い範圍のものに過ぎないであらう。隨つて又人物も小さく、こせくして居て、雄大・重厚の氣象に乏しくなる。今に生れて古へを知り、室を出でずして千里の外を察し、眼界も廣く見識も高く、圓滿豁達、品性の向上してやまないやうな人物は、何と言つても廣く讀書することを外にしては得られるものではない。書物は知識の寶庫で

ある、我等を啓發し、誨導し、鼓舞し、獎勵する無言永久の先生である。

併しこれは良書を善讀した場合のことであつて、如何なる書物をどんな風に讀んでも得られる結果ではない。天性優れた才能をもつて居るものでも、書物の選擇を誤り、亂雜な読み方をしたならば、その結果は實に恐るべきものがある。殊に年少の時代は物に感動することが多く、摸倣に陥り易い。隨つて一般に惡書に接すれば惡事を覚え、良書に接すれば善人となるものである。我等が書物の選擇を慎むべき所以はこゝにある。それならば何によつて選擇するか、経験に乏しく思慮の淺い我等は、まづ師長に相談

最も良い書物

せねばならぬ。たとひ自分が選擇した場合でも、淡泊に師長に打明けて、その指導に従はねばならぬ。これは今の我等の探るべき道として最も安全な方法である。

我等にとつて最もよい書物は、言ふまでもなく學校の教科書である。教科書は一見無味乾燥のやうに思はれるが、決してさうでない。如何にも面白味は少いかも知れぬ。併し面白味と善惡は全く別なことである。我等の教科書は今日の學問の精髓であつて、熟讀・玩味すれば、そこに無限の味を見出しえるであらう。教科書に次いで讀むべき書物は、偉人・傑士忠臣孝子などの史傳である。これ等はその人々の生きくした心の叫であつて、これによつて我等は

貴い思想を知り、高潔な品性に感じ、不斷の助力を得、公明正大な心となることが出来るのである。

我等は既に良い書物に就いて知つた。次にはこれを如何に讀むべきかを考へねばならぬ。如何に滋養に富んで居る食物でも、丸呑にしたら身體を養ふことは出来まい。書物に於ても同様である。我等は良書を得てこれを良く讀まねばならぬ。良い讀書法とは何かといふに、まづ心を專一にすることである。「心こゝに在らざれば視れども見えず、聽けども聞えず、食へどもその味を知らず」とはよく事實を穿つた教訓である。次には規律を定めて永續することである。謂はゆる一日温めて十日冷すといふ風のやり

方では何の役にもたゝぬ。我等はきまりよく一段・一節と順を逐つて、忘れず怠らず進まねばならぬ。これは大部の書物を完讀する方法である。次には十分に會得せねばならぬ。一時に多きを望んではならぬ。讀書の要は我等の智德を修得するのにあるから、熟讀・玩味して、出來るだけ精しくすることが肝要である。若し量だけでその質を逸してしまつたならば、むしろ讀書しない方がよいくらいである。殊に我等は今學問の根基を築く時である。眼光紙背に徹する底の熱心を持つて精讀するを要する。多讀・濫讀は必ずしも知識を擴める道ではない、却つて德を害ふに至る虞がある。この點また大いに注意しなければならぬ。

第十課 自然

自然の意味

自然とはあるがまゝのもの、何等人意を加へることなく獨りで出來たもの、それ自らの生長にまかせてあるものの總體をいふのである。木の間に囀る小鳥の聲、天地も碎ける雷の音、野末に咲く千草の花、萬古に輝くみ空の星、皆これ自然である。我等はこの自然に接し、よくこれを研究し利用することによつて種々の知識を修得し、新しい發見・發明をすること出来る。古來人類が發見した眞理は少くないが、特に自然研究から得たものが頗る多い。世に人類は次第に自然を征服するといふ者もあるが、人類は決して自

自然に對する態度

然を征服し得るものではない。人類のなし得る所は、たゞ自然を理解して、その力を我等の生活に利用し、自然と協同することである。

我等が自然に對して採る態度を大別すると三つになる。一は自然を樂しみ賞するもので、これを觀賞的態度といふ。二は自然を理解し研究することによつて眞理をつかまへようとするもので、これは研究的態度である。固より觀賞するといふ以上は、全然自然に關して盲目である筈はない。何も知らずに居ては觀賞も出來ないのであるから、既に觀賞的態度といふ以上、必ず一定の理解がある筈である。併しこれが研究的態度と異なるところは、後者が部分部分を

分析して、如何にして然るかといふ道理を探求する態度であるのに反して、前者はたゞ全體を總括して、その完美を賞するといふ態度である點に存する。ちやうど一幅の繪畫に對してもこれと同様なことがいはれる。即ち觀賞的態度で繪畫に對する場合にはそこに分析はない、全體としてその美を味はふのである。然るに研究的態度を取る場合には、この繪のよい點は何處にあるであらうか、線は如何、色彩は如何、全體の調和は如何といふやうに、部分部分に分つて探求して行くのである。

第三に我等には自然を生活に利用しようとする實行的態度がある。併し我等が知識を得ようとするとには、言ふま

自然から知識を得る方法

でもなく研究的態度を主としなければならぬ。

自然から知識を得るといふことは、即ち眞理を發見するといふことである。眞理は無限に自然の中に包藏されて居る。今日までに發見されたものは、その中の極めて小部分に過ぎない。自然是無數の眞理を、少しも隠すことなく我等の目前に展^{ひら}げて、自由に發見することを待つて居るのである。併しこれに對する我等の態度や、取るべき方法などに於て正しくなかつたならば、せつかくの自然の好意もこれを無にせねばならぬことになる。如何なる態度・方法を探るべきか。これが最も大切な事柄である。

まづ自然に對しては從順でなければならぬ。飽くまで從順に、自然の法則が示すところに服しなければならぬ。これが即ち自然に適應することである。自然に對しては我等の我儘・氣隨は絶對に許されぬ。次には飽くまで辛抱強くなければならぬ。ちれることなく氣を長くして、ぢつと落ちついて自然の教へることを研究せねばならぬ。この從順と辛抱は、我等の探るべき態度の中最も重要なものである。

この態度の下で、我等は自然を觀察し、更に種々の實驗を行ふことを要する。觀察とは何等の人力をも加へず、自然の生起するところに隨つて研究することであり、實驗とは故意に一定の方針の下に、一定の現象を起させて研究する

ことをいふ。この二つの方法は、自然研究に必要缺くべからざるものであつて、二者相俟つて始めて完全な研究方法といふことが出来るのである。これ等の態度・方法にして正しく、且我等の注意さへ十分であつたならば、必ずや自然是吾等に與へるに眞理につぐに眞理を以てするであらう。この故に吾等は平常から、注意力を鋭敏に働かせること、部分を精査すること、及び全體を達觀することなどの習慣を養つて置く必要がある。

第十一課 質問

驚異の心は學問
の第一歩

我等が幼少の頃、火の燃えるを見、雷の鳴るを聞いた場合に、如何にそれを驚き異しんだ事であつたらう。またやゝ年の長じた今日に於ても、自然界や人間界に就いて如何に多くの疑問を起すことであらう。この疑問・驚異の心こそ、すべての學問の起原であつて、疑問が起つて深く考へ、驚異に出會つて思を凝す、これが學問發達の道行である。我等は毎日學校に於て先生の教を受けて居るが、この時にもまた理解に苦しむやうな事柄が少からず起つて来る。「何故にさうなるのであらうか」といふ疑念の起るのは人の心の自然であつて、學校の課業に忠實であればあるほど、この疑念は益々多くなつて行くことがある。かやうな場合には、よく問ひ質して、明瞭に理解することに心掛けねばならぬ。

世には曖昧な理解に満足して居るものもあれば、又よくわからぬ事柄を、わかつたやうな顔をしてそのまま、捨てておくものなどもなかなか多い。これは眞に學問をする所以でなく、なげやりの心、いらない遠慮、質問を恥づかしと思ふ間違つた考などによるものである。これではせつかく學校に入つても、何の役にも立たない、學問の進まないのは固より、發達すべき貴い心の芽を、我と我が手で抑へて伸びさせないやうなものである。心せねばならぬ。

質問は恥でない

質問は決して恥でない。疑問の念の起ることが多ければ多い程、學問に忠實なのであつて、將來の發展の餘地の大きいものと見ることが出来る。殊にこの廣い宇宙には、數限りのない澤山な事柄があつて、十年、二十年、否一生を通じて専心研究に従事して居る専門家にさへ、不可解なことは數多くある。我等のやうな年少者にわからぬことのあるのは當然である、むしろ知識・經驗の乏しい我等でありながら、澤山な疑問が起るといふのは、却つて誇るべきことでもあると言はれよう。「問ふは一時の恥」といふ語があるが、これは問はなくて一生を無知に終る人々を警めた教で、質問が恥であるといふことを言つたものではない。我等の眞の恥は、知らないことを知つたふりするところにある、「知るを知るとし、知らざるを知らずとせよ、これ知れるなり」と孔子も教へて居る。我が身に知つて居ることとわからぬ

孔子
支那の神武紀元百二十一年。
百八十元百二十年。

徹底するまで質
ねよ

こととを明確にして、わからぬことを順を逐つてわからせて行くのが我等の學問の道である。

されど我等は、わからぬことに出會ふごとに、まづ第一に我が身に問はねばならぬ。我が身に問ふとは、篤と自分で思を凝して考へて見ることである。これは質問の第一步であつて、先生に問ひ質すより以前になさねばならぬことである。かやうにしてもやはり合點の行かぬことがあつて、始めて先生に教を乞ふべきである。この場合には、淡泊に遠慮なく、腑に落ちるまで問はねばならぬ。先生に學問上の質問をするのに、何の遠慮がいらう。つまらぬ遠慮は却つて師弟の間を疎くする所以である。自分の爲にならぬことは言ふまでもない。

また我等は疑問とするところは、何事によらず質ねるやうにせねばならぬ。こんな事を問ふのは恥づかしいとか、これを質ねたら友達が笑ひはすまいかななどと躊躇するのは、まだく志の堅くない證據である。停車場でわからぬことがあつたなら驛夫に問へ、野路を行つて不明の點があつたら農夫に尋ねよ。「三人行けば我が師あり」との誠の通り、萬事萬物我等の心掛次第で、師とならぬものはない。すべて人に物を質ねる場合には、よく禮儀を守らねばならぬ。言語を正し、態度を丁寧にし、己を虚しうして教を受けねばならぬ。質ね終つたならば、また厚く禮を述べ、苟も

無禮尊大にわたるやうなことのないやうにすべきである。とかく年壯血氣にはやる者は、その語調や態度が先方を責め詰るやうに流れ勝ちのものである。これは教を受ける者のとるべき道でないばかりでなく、普通世の中の交際にも於ても、十分慎まねばならぬことである。

第十二課 規律正しき習慣

規律の必要

規律とは物事をなすに順序よくきちんとすることである。學徳を修得しようとするものは、まづ規律を守ることが必要である。我等はまだ年が若く、社會に立つて活動して居る人々に比べると、なすべきことも少いやうに考へら

れるが、併し朝起きるから夜床に就くまでの日々の仕事を數へて見ると、隨分澤山ある。教科書の豫習・復習・宿題から、机や身の廻りのものの整頓、家事の手傳、登校の準備などを始めとして、どうしてもせねばならぬことが毎日數多く起つて来る。若しこれ等の事柄を、何のきまりもなく氣の向くまゝにまかせて行つたならば、とてもその日の中に片附くものではない。止むを得ず明日に延す、それが段々と積り積つて、遂にはいくらあせつても及ばなくなり、自分でもふしだらな生活とは知りながら、その日々を不愉快に送るやうなことになる。いつも後から追立てられるやうな不安な心持で、しかもその日の中になすべきことをも十分

規律を守る利益

になし得ずに生活することは、最も忌むべき處世法である。かやうな結果に陥るのも、つまりは一定の規律を守らないことから起るのである。我等は日常生活に於て、是非とも規律を守らねばならぬ。

規律をよく守ることの利益は、まづ第一に時間の經濟である。秩序よく、順次に物事を處理して行くから、或一事を行つて居る中は、それに專心になることが出来る。精神を一事に集注して一意・專心にするときは、精力の分散を防ぐことが出来て、時間を費すことが極めて少い。その上、完成了した仕事の結果は上出來である。この時間が節約され、しかも仕事の出來榮^{けい}のよいといふことは、時は金よりも貴い今後の新社會に於ては、益、必要なことになつて行く。

第二には健康上の利益である。夏休・冬休・春休など長い間の休暇の後には、胃腸その他身體の健康を害して學校を缺席するものが多いのは、屢々氣附くことである。これは多くは無規律放縱な生活に由るのであつて、誠に恐るべきことである。規律正しい生活をすれば精神と身體とを適當に働かせるから、自然に元氣も出て、健康を増進するに至るものである。

第三には品性の上に利益がある。だらしない生活が永く續くと、自分ではそれと氣のつかぬ間に、學業が一向進まず、成績は人後に落ちるといふ始末になつてしまふ、かう

なると、大概の人は自暴自棄に陥るものである。自分で自分に愛想がつきる程、我等に取つて危険なことはない。平氣で嘘をつき約束を破るのも、皆これから生ずることである。これがやがては習慣となつて、思ひがけない墮落の淵に苦しまねばならぬやうになる。規律を正しくする時は、物事が心持よくはかどつて、元氣も出れば張合もあり、着實に一步一步と我が心身を磨いて行くことが出来るのである。

規律は必ず實行せねばならぬ。自ら作つた規律に従ひ得ないやうでは、天下何事をも成就することは出来ない。故に我等は規律を定める前に、まづ我が身の力を考へねば

ならぬ。我が力の及ばぬことを企てるのは失敗の本である。また我等は適不適を考へねばならぬ。これ等を熟考した上に定めた規律は、飽くまでこれを實行する心掛でなければならぬ。時には遊びたいこともあらうし、苦しいこともあらう。併しこれを耐へ忍んで、斷然守り通す勇氣が必要である。かくて今日のことは決して明日に延さず、一日と實行を勵んで行く時は、自然それが習慣となり、學校に於ては良い生徒となり、社會に立つては良い人となり、思ひ残りなく多くの仕事を成し遂げ得て、快い生涯を送ることが出来るのである。

進歩と努力

第十三課 努力

我等は我が身の進歩・發展を常に希つて止む時がない。今日は昨日より、明日は今日よりといふやうに絶えず向上して行くことは、何人も欲するところである。併しこの絶えざる向上・進歩は、たゞ徒に得られるものでない。心の中では如何に進歩を望むことが切であつても、これを得る正しい方法に由らねば、到底その希望を達することは出来ぬ。その正しい方法とは何であるか、即ち努力である。固より人はすべて一様の力を備へて居るわけではない、生れつき才の有るものも無いものもあり、また能も不能もある。併

し如何なる人であつても、一事に成功し一能に秀でるには、必ず人一倍の努力をせねばならぬ。青史を繙いて俊傑に對する時、我等はその赫々たる成功の光にだけ心を奪はれず、その成功の裡には刻苦・勉勵、血を吐くやうな苦心の存することを見のがしてはならぬ。賴山陽は天才である、しかも彼は「我を才子といふものはまだ我を盡さないものである。我をよく刻苦すといふものは眞に我を知るものである」と言つて居る。

天性才能あるものであつても、努力しなければ何事をも成就することは出來ぬ。性質の秀でて居ないものでも、努力して止まなければ遂には事を成し遂げ得る。

私は困難より強いものである

何のその岩をもとほす桑の弓

我等の覺悟は常にこれでなくてはならぬ。

世には、最初事に着手する時には意氣込銳く、事の進むと共に困難の益加るに至つて銳氣頓に衰へ、遂にあゝ我が事遂に成らずといつて、自ら棄てるものが少くない。これは如何に才能があるものであつても、成功することはおぼつかない。困難は仕事に附きものである、事の進むにつれて困難の増すは當然である。殊に我等の目的が高遠であればある程なほ更である。難儀なことに出會ふ毎に益、勇氣を振ひ起し、あらゆる困難に打勝つに至つて、我等の人格は愈々その光彩を増すのである。一體難易といふことは、事

柄そのものにあるといふよりは、我等の心の感じから來ることが多い。故に困難だからといつて中途で挫けるのは、自ら我が身の力をみくびるものである。我等は困難にすぐ負けるやうな心弱いことであつてはならぬ。困難は人を玉にするといふ。才があつても恃むに足らない不才と雖も悲しむに及ばない、成業の唯一の道は實に絶えざる努力そのものである。

努力は人生のすべてのことに必要である。學校の生徒は學徳に努力の目的を見出すやうに、他の人々にはまた他の努力の仕方がある。實務に當り勞働に從ふのも尊い努力である。然るにやゝもすれば、我が身を特殊な偉いもの

のやうに考へ、労働者を卑しみ實務に從ふものを嘲るやうな態度をとるものがないでもない。誤れるの甚だしいものである。努力は尊い、労働は神聖である。人各、その處にあつてその務に従ふのは、人として最も尊ぶべきことであつて、何の卑しさも、何の嘲も存する筈のものでない。却つて學生にしてその本分を忘れて學業を怠り、たゞ運動・遊戲などばかりに耽る者こそ恥づかしく嘲けらるべきものである。心すべきことである。

世には運といふことも、僥倖といふことも無いことはない。併しこれ等は我が身以外から來るものであつて、我等の力の如何ともすることの出來ないものである。運や僥

倖を頼りにするものは、時に成功することはあつても、それは決して堅實なものではない、遂には見にくく失敗に終つてしまふものである。我等の頼るべきは、飽くまでも確實な絶えざる自己の努力である。

併し「勞して効なし」といふ語もある通り、大なる努力をしたかひもなく成功が伴なはぬことがある。これは努力の方法の誤つて居るのに因ることが多い。故に我等は、事に従ふ前にまづその事の善惡・正邪をよく考へ、順序・方法を研究し、愈々着手したならば、全力をそれに集注せねばならぬ、そして事の成功するまでは、如何なる困難に出會つても、ひるまず屈せず、努力を永續する強い意志をもたねばならぬ。

なほ身體の健康は成功の基礎であるから、これに意を用ひることは殊に必要である。

快活な人となれ

第十四課 快 活

明治天皇の御製に

さしのぼる朝日の如くさわやかに

もたまほしきは心なりけり。

とある。我等青年は、人生の最も光り輝いた希望に溢れて居る時代である。この時代には出来るだけ心を快活に持ち、無邪氣に淡泊に生活せねばならぬ。恰も旭日が始めて東天に輝き渡る時のやうな、一點の塵も止めない晴々した

心持になつて世に處してこそ、智徳も進み仕事をも成就することが出来よう。これに反して常に陰鬱な精神で居る時は、目に映るもの耳に聞くもの悉く疑はしいものとなり、陰鬱の上に更に陰鬱を増し、はては世をはかなみ呪ふやうになるものである。明治天皇の御製は、我等の日夕拜誦して、以て自ら誠め励ます絶好の御教である。

元來青年時代の我等が快活な心持になるのは自然であつて、別に工夫を要することではない筈である。併し心得の悪い爲に、知らず識らずの間に陰氣になり心の僻むやうな状態に陥るものも少くない。行に蔭日向なく、爲すべきことをなし、爲すべからざることは苟も爲さず、規律を尙び、

快活になる方法

攝生に注意し、勉強も、運動も常に適當な程度にするやうに、日常のふるまひを心掛けたならば、心氣はおのづから快活になるであらう。特に身體の健康は、精神の快活に多大の關係をもつて居るものであるから、衛生に注意することは最も必要である。我等の時代には、やゝもすれば運動・飲食共に度を失し、睡眠が不規則になり易い。これが爲に屢々神經過敏・神經遲鈍などに陥ることがあり、快活な心持を害ふばかりでなく、更に色々の恐るべき結果を來すものである。心せねばならぬ。

併し又一方から考へると、心持が快活な時は、身體の諸機關が常に生々と活動する爲に、身體の健康は益々旺盛となり、

病氣などには罹らぬものである。英國少年團の心得の一つに「微笑して口笛をふけ」といふことがあるが、誠に味のある語である。身體や氣分が悪い爲に嫌氣のする時には、笑ふことも口笛を吹くことも出来るものではない。故に若し身體に故障あることに氣附いたならば、我と我が心を立て、力めて快活にふるまひ、快いほゝ笑みの中に事を處するやうに努めねばならぬ。疾病も遂には影を潜めるに至るであらう。この精神の快活は身體の健康を増し、身體の健康は精神の快活を進めて行くといふ道理を、よくよく辨へねばならぬ。

快活は友を増す

まりがない爲に、言語も明晰に、舉動も亦活潑である。天空海濶、人に接して些の不快の念を抱かしめることがない。のみならず、常に正道をとつて動かないから、心中何の疚しことがない、隨つて有爲の氣が鬱勃として身體に溢れ、人をして如何にもたのもしい氣持を起させる。こゝに於て「桃李ものいはずして下おのづから蹊を成す」の諺の通り、求めなくとも友は自ら集り、父母には愛せられ、先生には賞められ、その日その日が愉快で、世の中はいつも春日の麗かな氣持となつて來るのである。これに反して苦惱な顔色や、意氣の銷沈することは、人をして何とはなしに不快の念を抱かしめるもので、近親のものさへ我と接するを好まない

やうになる。恐るべきことではないか。

人生には波風が多い、天候に晴雨のあるやうに、我等の生活にも時に不快の念の涌くことも隨分ある。かやうな時に我等は如何に處すべきであらうか。まづ第一に我が顔に注意し、力めて快活になすべきである。快く一笑せよ、一度快活になることが出來れば、千百の苦難もおのづから跡を收めるに至るであらう。これを外より内を修めるといふ。笑ふ門には福の來るものである。

快活と輕佻とは全く違ふ。この區別をよく辨へて置かねばならぬ。やゝもすれば快活の度を過して輕佻に流れ易いが、一度輕佻にふるまへば事毎に慎重を缺くに至り、浮

薄との嘲を受け人の信用を失ひ我と我が人格を毀損するものである。快活は貴ぶべきである併し輕佻は飽くまで避けねばならぬ。

自重とは何ぞ

第十五課 自重

自重とは自ら我が身の價值を認めてこれを尊びこれを愛護して品性を高潔にし人格の完成を圖ることである。故に猥りに自ら卑屈にするは自重する所以でない。併し自分の才學や身の廻りの道具衣服居宅門地財産などに累はされてこれを人に誇るのは謂はゆる自負であつて、自重といふことは出来ぬ。また世にはたゞ他人の賞讃・非難の

爲に心を動かされ讚められては驕り高ぶり、誇られては失望落膽する者も少くない。固より讚められて喜び、誇られて悲しむは人の常情ではあるが、若しかくの如くに常に他人の毀譽にだけ動かされて居ることになれば、自分といふものは全くあつても無いのと同様で、生れがひある人となることは出來ない。かやうな人も亦自重するものでない。併しまた自重しなければならぬとて、自重と剛情とを一緒に考へてはならぬ。剛情といふのは、己の不正・邪惡を認めながら、なほこれを改めることをせず、己の枉つて居ることをどこまでも押通さうとすることである。自重はこれに反して、己の誤は直にこれを改め、義のあるところに従つて

人々は各々その境遇に應じて尊い

飽くまで進んで行くことである。これが眞に己を愛し、己を尊ぶ所以である。

我等は多くの人々と共に一大社會を組織して生活して居るものである。そしてこの社會には種々の職業があり、また富める者と貧しい者、貴族と平民などいふ區別はあるが、職業には決して貴賤の別があるものでなく、また富者や貴族が貴くて貧者や平民が賤しいといふことも出來ない。貴賤の別はこゝに存するものではなくて、實に人々が各、その從ふところの道に於て、その本分を眞面目に盡すか否かによつて別れるのである。故に貴族とても平生何の爲すところなく懶惰に一生を送るとなれば、その人は人として

の價值のないものであり、平民とても、その從ふ道に於て誠心誠意努力して己の本分を盡すならば、立派な貴い人といふことが出来る。この社會生活に於ては、その組織の中には、その本分を盡すものは、如何なる地位・身分のものであつても、絶対に貴いのである。大臣であるからと言つて必ずしも貴くはない、貴い所以はその本分を盡すところにある。労働者だからと言つて必ずしも賤しくはない、その本分を盡すに於ては、貴さは大臣と何の別もない。ある。

この故に、人はその地位の如何にかゝはらず、自ら自己を輕んずることなく、我が意志を重んじ、我が價值を信じ、堅く我が身を愛護して品性の高潔を保ち、日に月に人格の完成

本分と自重

に努めねばならぬ。「人自ら侮つて然る後人これを侮る。」といふ古語は、この邊の消息を言つたものである。貴いのも賤しいのも決して外物に因るのではない、要はその人の品性の如何に因るのである。人は人によつて作られるもので、如何なる場合にも物は人を作ることが出来ない。

我が身の社會に於ける地位を知り、己の本分の貴い所以を自覺するのは、自重第一の工夫である。古語に「汝自らを知れ」とあるが、これは自分の價值と、その本分の貴さを自覺せよといふ意味である。我自らを知ることは萬善の本である、人を嫉むことも、人に詔ふこともなく、自らその堵に安んじて自立するは、これ自ら自分の貴い所以を知る爲では

ないか。攝生してその身を保ち、勉強して學徳を修養する、これその本分の貴きを知つてこれを盡さうとするに由るのではないか。我等は我自らを知らねばならぬ。

己の尊ぶべきを知つたならば、同時に他人の尊い所以を知らねばならぬ。己だけを尊んで他人を賤しむのは、眞の自重の道ではない。眞の自重は常に他人を尊ぶことと兩立するのである。

他人を尊べ

第十六課 熟慮斷行

熟慮の必要

我等は試験を受ける時でも、人と約束する場合でも、また何か一事を計畫するにしても、必ずその着手する以前に熟

考することが必要である。不十分な用意の下に行つた事に、如何に過失や失敗が多いかは、多くの人々の経験するところであらう。この過失や失敗の原因は色々であつて、俄にいづれと決定することの出来ないものであり、時としては、人力の如何ともすることの出来ないやうな場合がないでもないが、多くの場合、我等が事前に於て反復熟慮するとの足りなかつたのに因るものである。この過失や失敗の數が少い中はまだしもあるが、これが度重なるに隨つて、人は我等を信用しなくなる、また我自らも餘り度々の失敗を見る時は、自信の力頓に衰へて、何事にも引込思案をするやうになり、果ては自暴自棄にさへ陥るに至るのである。

人には不信用となり、我自らも自棄するに至つては、人は遂に廢人と同様、人としての價值のないものとなざるを得ない。この故に、我等は何事をなすにしても、最も周到・精密に、己の力の及ぶ限り、一切の點を考へ抜き、用意をさく怠りない程度まで慎重な態度をとることに努めねばならぬ。然らば我等は如何なる點に就いて熟慮すべきであるか。たゞ腕を拱いて徒に考へ込むだけでは不十分である。まづ我が行はうとする事柄が、今行ふべきものであるか否かを考へねばならぬ。我等の行ふべき事は限りなくある、これをきまりなく手當り次第にやつて行くといふことになると、事に統一を缺き、その結果に於て非常な損失となり、ま

た種々の行違を生じ、遂には成るべきものも成らずに失敗に終つてしまふことが少くない。事の緩急を考へ、急を要するものから行つて行くことに努めねばならぬ。次にはその事の正邪・善惡を考慮せねばならぬ。我等の行ひ得るものには、行つて善いものと悪いものとがある。不正・惡事をなすのは人としての道に反する。この正邪・善惡のけじめは眞に重大なものであるから、篤と考へて常に邪をさけて正につき、惡をすてて善を行ふやうにせねばならぬ。次には今に於て行ふべき事であると考へた事に就いても、これを行つて行く順序・方法を考へねばならぬ。世に目的の爲に手段を選ばないものもないではないが、これは大なる

謬である。如何にその目的は善であつても、これを行ふ方法・順序が誤つて居たならば、その結果は結局悪いことになるのである。次には己之力の及ばない事を計畫することを避けねばならぬ、すべて非望を抱くのは失敗の本である。高山の頂をきはめるのには、平地の一步から着々と始めねばならぬ。行に於ても同様で、我等は進んでは偉大な事を行はねばならないが、まづ初には小さな事であつても、己の力の及ぶ限りに於て満足すべきである。最後に思慮・分別をするやうな急を要する場合は餘儀ないが、平生の事情の下に於ては、最も精神活動の生々とした時を擇ぶがよい。

斷行せよ

一日でいへば、夕方よりも朝早くがよい。夕方は重大な事件、殊に大きな心配事などを考へるには不適當である。

併し思慮分別を重んずる餘り、優柔不斷に陥つてはならぬ。「過ぎたるは及ばざるが如し」の諭の通り、熟慮もその度を過ぎるとよろしくない。既に己の力で十分に考へ抜いて最良な事と信じた以上は、十分の安心を以て断乎として行はねばならぬ。徒に遲疑決せざるは事をなす所以でない。一寸のばせば一尺延びるものである。好機は一度逝けば、復と來ない。「思ひ立つ日が吉日」である。必ずその時に於て断行するやう心掛けねばならぬ。伊太利の諺に「汝、氣をつけて鞍を置け、その上では大膽に走らせよ」といふの

はこれを言ふのである。併しこれは己の力相當のものに就いて言つたのであつて、極めて重大な、我が力に餘るやうなことは、十分に慎んで、先生や父母などの意見を聽いた後でなければ手を着けてはならぬ。これは決して断行に反することではない。「静止せる事物を動かすなれ」とは、このやうな場合の心得である。

第十七課 質 素

質素の必要

衣服・飲食を始めとして、学用品、身の廻りの道具など日常の用具は、すべて不自由を感じないのを限度として、成るべく費用を省き、つゝましくするを質素といふ。故に質素は

考なしに贅澤な物品を買入れることを慎むばかりでなく、更に現に我等が使用して居るもの猥りに損傷したり破棄したりなどせず、これを大切に取扱ひ、ましく用ひることをも含んで居るのである。

常に質素を旨として生活して居ると、自然に財に餘裕を生じ、他日必要な場合の用意とすることが出来る。併し若し金錢上の利害ばかりを考へて質素を守るといふことになれば、とかく吝嗇といふ弊害に陥り、同時に、金錢に不自由を感じない人々は、質素は守らないでもよいことのやうにも考へられるかも知れぬが、それは大なる誤であつて、十分區別して考へねばならぬ事である。質素は勿論一身一家

一國の經濟上から考へても必要なことではあるが、その大切な所以は唯こればかりではない。すべて人の精神は外部の狀態から影響を受けることが大であつて、常に奢侈・贅澤に流れるものは、思はぬ中に浮華・柔弱に陥つて、心にしまりがなくなる。これに反して質素の習慣のあるものは、自ら剛健・篤實になり、精神にしまりがあつて、しかも平靜・溫和な状態に安んずることが出来るのである。足るを知り分に安んずるは大切な處世訓である。この故に、質素は貴賤・貧富を問はず、すべての人人が必ず行ひ守らなければならぬ重要な事柄である。

しいことではあるが、これと共にやゝもすれば奢侈に流れることが多い。奢侈は質素の反対であつて、これに耽る時は人々が墮落して一身一家を亡すことになる。すべて文明に對する人々の態度が享樂的になれば、その社會の進歩は止つてしまつて、次第に退歩するばかりである。これに反して質素を守り、日々勉勵して文明を我が力で造り上げるといふ事になれば、その社會は愈々進歩して止む時がない。一國の興隆するのも、一家の繁榮するのも、一身の出世するのも、皆この創造的の質實な心掛に因るのである。殊に修學の眞最中にある我等學生が、若し學用品や服裝などばかりを華美にし、贅澤にするやうなことになれば、學德の退歩

を來すは固よりのこと、遂には不良の徒となり、父母・師長に心配をかけるばかりでなく、社會・國家に大きな害毒を流すに至るものである。この故に我等は、まづ我が一身を質素に持し、進んで質實・剛健の級風・校風を發揚し、我が學校をして益々優良な地位に進めて行くことに努めねばならぬ。併しよく見える顯微鏡は價が高い、また高い代價を拂はなければ丈夫な靴を得ることが出來ないこともある。要するところ分に應じて適度を考へることが肝要である。それと同時に、如何に用ひる道具はよくても、これを用ひる人が立派でなかつたならば、決して十分な成績をあげることは出來ない。仕事の能率は主としてそれに從ふ人々の心掛

によるものである。裕福な家庭に育ち、立派な學用品を持つて居るからとて、成績がそれに正比例する譯でもなく、家が貧しくつて種々の點に不自由があつても、なほ良い成績をとるのに何の妨もないのは、この心掛如何によることが多ないのである。奢侈を捨てて質素に遷ることは、成功の第一步である。

質素の工夫

明治天皇は

何事も思ふがまゝにならざるが

かへりて人の身の爲にこそ。

といふに、主として私慾・物慾を制することが出来ないのと、虚榮の強いのとに因るものである。この二つに捉はれるのは共に恥づべきことである。これは何人も承知して居る筈である。少壯有爲の我等が、これ等を制し得ないことがどうしてあらうぞ。力めてこれに打勝ち、質素に就くやうにせねばならぬ。千丈の堤も蟻の穴から壞れるものである、若し一物でも贅澤にする時は、一事が萬事、すべての事柄が華美になつて行くものである。慎まねばならぬ。

第十八課 廉 恥

廉恥の心

我等は自分のことに就いて、これはよくなかった、これは

すべきではなかつたと深く不安に思ひ、人に對して面目ないと感ずることが屢々ある。この心持が即ち恥を知る心であつて、こゝにいふ廉恥といふことがそれである。廉恥は常人の自然にもつて居る常情であつて、これがなかつたらば、人は禽獸と何の異なるところもない。隨つてこの心の鋭いものは、即ち良心の働く激しいのであつて、絶えず我が身の不足を補ひ、不善を改めることに努めるやうになるから、益人としての眞の道に深く進み得るがこの働く鈍い人は恥を恥とも思はず、平氣に悪いことを行ふから、次第に人としての價值を失ひ、禽獸と同列に我が身を陥れてしまふ。眞に廉恥の心は徳に入るの門戸である。

破廉恥の人

廉恥の心のなくなつてしまつた人を破廉恥の人といひ、また厚顔・無恥の徒と呼ぶ。かやうな人の良心は既に癡痺して居るのであつて、正邪・善惡の區別がつかない。隨つてどれほどの悪事でも行はないといふことがなく、しかも恬として恥ぢるところがない。世に最も恐るべきものはこれ等無恥の徒である、單にその身を亡すばかりでなく、社會に及す禍害は計り知ることの出來ないほど大である。かかる徒輩が多ければ多いほど、社會は益々不健全になつて行く。近時、我が國の狀態を顧る時に、我等は幾多憂ふべき事柄を見出すのであるが、これ等は、一面、破廉恥の人の増加を示して居るではからうか。我等青年の自ら深く戒めね

ばならぬことである。

また世には自分の良心では悪い事と知りながらも、それが他人に知れないとか、法網に觸れないとかいふ場合には、進んで改めようとしない者もある。これが即ち「免れて恥なき人」といふのであつて、良心の癪痺した人である。我が國の古武士が廉恥心に篤く、刀の手前、武士の面目と言つて慎み、若しそれを汚したら生きて再び人に見えなかつた氣概と比べて、如何に賤しむべきかを見よ。

我等が外から加へられる非難侮辱には、時として虚妄なものがないでもないが、これが我が身の名譽を毀損するやうな場合には、恥づかしいといふ感が起るのである。これ

は廉恥心の自然の發露であつて、常人の常に経験するところである。併し眞の廉恥の感は我が良心に對して起るものである。隨つて眞に恥を知るとは、人の知ると否とにかくはらず、我が身の不正・不善を自ら責めることである。故に我等の努むべきは、猥りに人の言動に動かされることなく、我が良心に鑑みて眞に恥づべきを恥ぢ、恥づべからざるを恥ぢないといふことでなければならぬ。眞に恥づべからざるを恥ぢるのは、また我等の恥とせねばならぬところである。

我等學生としては何を恥づべきであるか。人の富貴を羨んで我が身の貧賤を恥ぢるものがある。他人の容貌・衣

服の美を妬んで我が醜を恥ぢるものがある。また體質の弱いことや、才能の未熟なことや、住居・飲食の粗末などを恥ぢるものもある。これ等こそ實に恥づべからざるを恥ぢるものであつて、眞の男子の與せないところである。富貴や、容貌や、衣食住や、我に於て何のかゝはるところぞ。體質が弱ければこそ運動・攝生を勵み、才能が未熟なればこそ學德の修養に努めるのである。恥づべきはこゝにあるのではなくて、すべてこれ等に捉はれて自棄するところに存するのである。更に我等學生には學生としての本分があることをゆめ忘れてはならぬ。この本分を盡し得ないことが、我等にとつて最も恥づべきことである。德を修め、智を研

き、體を鍊ること以外に心を勞するものは、まだ共に談ずるに足りない。我等はこの本分に對して、果して何の恥ぢるところもないであらうか。懼れ憂ふべきはこゝである。

恥を知るは眞に大切なことであるが、我が身の不足や過失を恥ぢることが過ぎて、それを正し改める力を失ひ、自暴・自棄に陥ることは慎まねばならぬ。人は誰しも過はあるものである。故に過のあるのが必ずしも恥ではない、これをよく改め得ないのが恥である。同じ過を再びせず、日に日に善に遷ることが、我等修養の本旨である。

第十九課 高 雅

世に「初對面の一警」といふことがある。我等が始めて人に接する時、何となくおくゆかしく懷かしい感じのする人がある。かやうな人をよく考へて見ると、言語も上品で、ばつきりして生氣があり、身體の様子や動作が穏和の内におもくしいところもあり、人を引きつけるやうにあることがわかる。高雅な人、氣品の高い人などといふのは、かやうな人をいふのである。高雅な人の反対は野卑な人である。野卑な人は人に嫌はれ疎んじられる。高雅な人を重んじこれと親しくしようとするのも、野卑な人を軽んじこれを避けようとするのも、共に人の常情であつて、我と人とによつて變りはない。我等が社會に立ち事をなすに當

つては、人と交り、互に相依り協同して行かねばならぬ。然るに若し人々から疎外されると、自分の世界が狭くなるわけで、單に苦痛を感じるばかりでなく、結局世の中に立つて行くことが困難となつて来る。故に我等は野卑に墮することを避けて、努めて高雅な人となることに心掛けねばならぬ。

智を研くことは固より我等の本分であつて、眞に大切な務である。併したゞ智を研くばかりでは高雅な人にはならない。身體を強壯にすることも亦我等の本分である、併し徒に身體を發達せしめるだけでは氣品は高くならぬ。況やたゞ門地や財産によつて得ようと思つても、表面一時

高雅な品位と性

の見かけをよくすることは出来ようが、眞に高雅の人となることは到底おぼつかないことである。それならば如何にすべきであらうか。

一般に人が心の中に思つて居ることは、如何に隠さうとしても自然に外に表れるものである。故に容貌や動作や言語などを注意して觀察すると、ほゞその人の性格を知ることが出来る。この内にある性格と、外に表れた品とは、眞に密接に關係して居るもので、内に高潔な性格を養成すれば、外に必ず高い氣品として表れるものである。これと同様に、外の品を正しく整へれば、おのづから内に高い性格が養はれて来る。即ちこの二つは相倚り相助けて共に修め

整へられて行くものである。この故に我等はまづその本を修めることに努めねばならぬ。

本を修ること、即ち内を整へて高潔な性格を養成することは、極めて困難なことではあるが、我等としてまづ心得べきは、我が感情を麗はしい、すなほなものとすることである。

感情のはしい、きつい人は、とかく過激になつて、言動が多く中庸を失ひ易い。かやうな人は、誰しも高い氣品のある人とは思はないであらう。さてこれに就いて注意すべきは讀書である。高尚な純潔な讀物は、讀む者をしておのづから高雅な品位を備へしめるに至るものである。また遊戯や娛樂などもこれを選ぶことが大切である。これ等は

高雅な品位を養ふ道

その種類も多く、悪いものも少くない。選んで善いものをとらなければ却つて弊害を生ずる。我等にとつて最も適當なものは、野外の運動、花卉の培養、小鳥の飼養、その他自然の風光を愛することなどである。この外、我等の性格を高潔にする方法は數多くある。本書に教へて居るところのものはすべて皆さうである。我等はよくこれ等の教に従つて、一步一步進んで行くことを怠つてはならぬ。

我等年少者にとつて内から修養する方法が困難であるに反し、外から入る方法は比較的容易である。高雅な品位を養ふことは、決して氣取ることや、高慢になることや、衣服を華美にすることなどではない。これ等は却つて氣品を

下げる所以であるから、大いに慎まねばならぬ。日常我等の守るべきは、まづ心中の光明であることである。誠心を以て事に従ひ、内に省て何等疚しいことのないやうに行動することは最も大切である。心の光明は容貌の端正となつて表れ、ゆつたりとやはらいだ顔色になることが出来る。食事の時にいちぎたなくすること、遊戯の時に勝負だけを眼中に置いて不法な行爲をすること、試験の時に點數ばかりとりたがること、人と談話する場合に我こそはといふやうな態度をとることなどは、最も品ひんを墮すもので、これが習慣となれば、遂に野卑な人となつてしまふのである。特に心を用ひてこれを避けるやうにせねばならぬ。

第二十課 直き心

直き心の意味

直き心とは仰いで天に愧ぢず、俯しても地に愧ぢず。といふやうな、我が心中に一點の曇もけがれもなく、隨つてまた何等恥ぢるところもなく、己を欺かず人を陥れず、公明・正大、誠を以て終始一貫するまつすぐな心、即ち良心の指圖に従ふところの誠心・誠意である。

行の本は美德善

我等の心と言行との關係は、恰も形の影に於けると同じやうなものである。心が直く正しくあれば、言ふことに嘘も偽もなく、行に蔭日向がない、若し心が曲つて居つたならば、言行はおのづから不正となる。影を正しくしようとするには、まづ形を整へねばならぬ。これと同様に、言行を美しくしようと思つたなら、第一に心を直くせねばならぬ。直き心はすべてを自然のまゝに見、その當然の道に従ふことで、萬善の本である。純なる心は天地・自然に對して共鳴・同感することが出来る。この美しい心を以て君に事へれば、則ち忠となり、親に事へれば、則ち孝となる。兄弟・姉妹に友愛をつくすのも、朋友と交つて信實であるのも、更に廣く社會一般の善の爲に奉仕するのも、一つとして直き心を本とせぬものはない。我等の祖先はこの心を「^{あら}明き淨き心」といひ、また「明き淨き正しき直き心」とも言つて、一切の善行をたゞこの心一つの中に包括させたものである。

若しあらべての人がこの心をもつて事に従つたならば、社會は正しい道に支配されて、邪惡の行は自ら影を消し去つてしまふであらう。今の社會に多くの聞くに堪へない惡徳が行はれて居るのは、世人がこの直き心をくらますに因るのである。

直き心の反対は曲つた心である。直き心が明るい心であるのに對して、曲つた心は暗い心である。前者が淨い心であるのに對して、後者は穢れた心である。曲つた心はあらゆる惡徳の本である。虛言をいふのも、卑怯になるのも、人を妬み怨むのも、皆我が心の曲つて居るところから起るのである。若し一度これ等の過に陥つたならば、次から次

へと不正・惡事をせねばならなくなつて、はてはどんな非行をしても憚らぬやうになるのである。法律に觸れるやうな悪人でも、元をたゞせば、つまりは初めに少しのゆがみまがりを直すことが出來ずに居た爲であつて、この曲つた心が禍をなして居るのである。一體、人は自然に直き心をもつて居るものであるが、何故に種々の惡事を行ふに至るかといふに、それは私慾の爲に我が直き心が蔽ひかくされるからである。私慾くらゐ恐ろしいものはない。これがもとで、人は一切の善惡の判断を誤り、遂に邪道に陥つてしまふのである。虛言をいひたくなつた時、人が怨めしくなつた時、學校の課業を休みたくなつた時、何をおいてもまづ第

學問と直き心

一に我と我が心を省ねばならぬ。そこには必ず私慾の念が潜んで居る。この故に我等は常に我が心を反省して、私慾に捉はれないやうに心掛けねばならぬ。

直き心はやがて眞實を愛する心である。眞實を愛して本當のものをつかまうとするのが學問の目的である。隨つて直き心はたゞ我等の修身の道に於て大切であるばかりでなく、學問するのにもまた極めて必要である。我等は今學校に於て日々學問して居るのである。常に直き心を以てして始めて眞の學問を爲し遂げ得る。文學藝術もまた直き心を以て自然や人情の眞直なところをつかまうとして居るのである。

夫心を直くする工

既に學んだやうに、私慾は良心を曇らせる根本である。故に我等は絶えず私慾を制して良心を磨き、これを明らかにすることに努めねばならぬ。良心さへ曇らなかつたらば、どうして悪い道に踏みまよふやうなことがあらうか。

昭憲皇太后は

かへり見て心にとはゞ見ゆべきを

たゞしき道になどまよふらん。

と仰せられて、これを諒められた。されば我等は、怠らずに智を研いて自然の道理を辨へ、情を清らかにして社會の人情を知り、俯仰天地に愧ぢないやうに行動せねばならぬ。また人の知ると否とによつて心の持方に表裏のあるのは、

中學修身卷二

110

楊震
支那後漢の賢人。

心を暗くする所以である。楊震の四知といふ話はよく人の誠にひくことであるが、獨を慎むのは心を直くする第一の工夫である。

中學修身卷一終

大正十一年十月二十日印
大正十二年一月三十一日發行
大正十二年一月十三日訂正再版印刷
大正十二年一月十六日訂正再版發行

中學修身奧付

年三十正人
價定時臨

著作者 友枝高彦

東京市神田區通神保町九番地
合資富山

合資會社富山房社長

代表者

發行所

東京市神田區
通神保町九番地

會合社資富山房

著 權 作 所 有

著作者 友枝高彦
東京市神田區通神保町九番地
印發刷行者兼會社富山房

東京秀英會印刷

広島大学図書

2000026409

